《解説》

イタリアの移民事情とイジアーバ・シェーゴ

山根美奈

イタリアは一八七〇年頃から、一〇〇年間に二〇〇〇万人もの働き盛りの人々を南北アメリカ大陸へ移民として排出した。この流れを逆転させたのが一九七二年の石油危機をきっかけとした急激な景気変動だった。これによって北部ヨーロッパ諸国が移民政策を変換したために、締め出されたヨーロッパ圏外からの労働者らがイタリアへ流れ込んだのである。その時イタリアは景気の上昇期を迎えており、外国人労働者は、アメリカ大陸へ輩出した労働力の空洞を埋める形となり、明確な制度もないまま、安価な労働力として歓迎された。現在、正規登録者は五〇〇万人を数え、その他に不法就労者も数百万人いるとされる。彼らは、あらゆる業種でイタリア経済を支えているが、中でも看護師、老人介護者、家政婦が全体の十五パーセント（Caritas　第21号）を占め、移民の重要な職種となっている。

作者イジアーバ・シェーゴの両親は、一九六九年のソマリアの政変によってイタリアへ政治亡命した。一九七四年、ローマで生まれた作者は、ソマリア語と民族の生活習慣を堅持する家庭内で育つ一方、幼稚園から大学院まで、イタリアの教育を受けた。しかし、正規雇用の職は得ていない。非正規雇用の書店店員となったが、そんな中、二〇〇二年に新たな移民取締法が制定された。

イタリアの移民法は、一九九〇年、民主キリスト教政権下で初の移民法が制定されたが、その直後に五〇年続いた政権が崩壊した。その後は、左右の連合政治へと移行し、政権が交代するたびに移民政策も変化してきた。二〇〇二年の移民取締法ボッシ・フィーニ法は、極右政党北部同盟の主導で制定され、外国人の指紋採取と再登録が実施された。「サルシッチャ（豚の腸詰）」は、この時の作者の経験を綴ったものである。この作品は、いわば処女作であり、移民による文学作品のコンクール「エクセトラ文学コンクール」に応募し、最優秀賞を獲得して世に出るきっかけとした。

「エクセトラ文学コンクール」は、合法、不法にかかわらず、イタリアに在住し、労働に従事する外国人自身による文学作品のみを対象とした文学コンクールである。一九九五年から十二年間続けられ、一八〇〇作品を集めた。このコンクールを登龍門として移民作家という冠を獲得し、活動している作家が多数いる。イジアーバ・シェーゴも二〇〇三年に当コンクールで最優秀賞を獲得するとすぐに、小説『ローダ（Rhoda）』（二〇〇四年）を発表し、続けて小説、エッセイ等八冊（二〇一二年現在）を上梓した。初期のエッセイや小説は会話的な文で綴っているが、長編小説『バビロニアのかなたへ（Oltre Babilonia）』（二〇〇八年）では、母と娘の二つの物語りを一方は現在から過去へ、他方は過去から現在へと語る複雑な構成を成功させ、文学作品として評価された。また、イタリア在住のアフリカ人向けに情報発信するジャーナリストの顔も持つ。